

聞こえません、見えません、
だから私を
ほっといてください。

◆ —◆
gacchi

登場人物紹介

CHARACTER

エメラルダ

国王の側妃。
腹黒い性質で、
義娘を使い何か
企んでいて……

リンジー

レオンハルトの
婚約者を自称する
侯爵令嬢。

ジョージア

レイフィアの兄。
妹以外の家族を嫌い、
家を出て魔術師として
暮らしている。

レオンハルト

レイフィアの学園の同級生で公爵家の
次男。呪いをかけられていたが
レイフィアに助けられ彼女に好意を抱く。

レイフィア

家族から虐げられていた伯爵令嬢。
解呪の力があるがそれを隠して
目立たず生きていた。

目次

聞こえません、見えません、
だから私をほっといてください。

書き下ろし番外編
レオンハルトの子

聞こえません、見えません、

だから私をほっといてください。

第一章

眠い……あくびを我慢しながら移動教室へと急ぐ。

誰かに見られたかと思ったが、あたりは人がまばらで、誰も私——レイフィアのことなど見ていなかった。

昨日の夜、ジョージアお兄様が屋敷に帰ってきた。久しぶりに会えたからうれしくて、つい遅くまで話し込んでしまった。なにせ前に帰ってきた時から、ひと月と少しぶりだったのだから。

お父様が再婚して以来、この家はお義母様^{かあ}が中心の家になってしまった。お父様にとって前妻の子であるお兄様と私は邪魔でしかなかったようだ。

お義母様^{かあ}や義妹^{いもうと}と顔を合わせると、嫌味を言われるだけならまだしも、頬を叩かれたり突き飛ばされたりすることもよくあった。それを見たお父様が助けてくれることはない。だから、できる限り顔を合わせないように、まるで存在しないかのように私室にこ

もって暮らしている。

そんな状態が何年も続いて、お父様の跡を継いで伯爵になるはずだったお兄様は、学園の卒業と同時に家を出てしまった。お父様の許可を得ずに家を出るというのは、伯爵家との縁を切るのも同然だった。そのため誰にも見つからないように帰ってくるから、お兄様に会えるのはいつも夜中だ。

家との縁を切ってまで出ていったお兄様が私に会いに来るのには、理由があった。

魔力がある者でもめったに発現しない特別な魔術、その者にしか使えないという固有スキルを持つお兄様は、私を守るために魔術をかけてくれていた。こういった魔術は長期間効果を持続させることが難しいため、たまに帰ってきて私に魔術をかけ直してくれる。そして無事であることを確認すると、いつものように注意される。

「いいか？ あと少しだから我慢するんだ。目立たないように、こっそりと、おとなしく過ごすんだよ」

「ええ。わかったわ。学園でも家でも、おとなしく我慢しているわ」

「レイフィア。あと少しだ。俺が迎えに来るまで、見つからないように頑張るんだ。いいね？」

私よりもお兄様のほうが忙しくて大変なはずなのに、時間をかけ心配そうに何度も念

を押される。

大丈夫、こうしておとなしく過ごしていれば、誰にも見つからない。一人で歩いているように、あくびをしていようが、私のことは誰も気に留めていない。

いつもどおりにぼさぼさの髪で顔を隠し、華美にしない制服で、騒がしい学生たちとは距離を取って廊下を歩く。人が少なくなってから移動したので、もう休憩時間は残り僅か。

次の国史の授業は教師が厳しいことで有名だ。もし遅刻しようものなら立たされて目立ってしまう。そうならないために急がなければならないかった。

この階段を下りれば国史の教室に着く。

階段を下りようとしたところで、耳障りな音に気がついた。

リン。リン。リン。

音が聞こえてくる。嫌な音だ。聞きたくないけれど耳をふさぐこともできない。

聞いたことのない音だが、これはあれに違いない。

止まらないその音は、階段の下から聞こえてくる。

どうしようか。本なら音のする場には近寄りたくない。だけど違う階段を使って移動したら、授業に間違いなく遅れてしまう。一瞬だけ悩んで、ため息をついて歩き出す。

大丈夫、気がつかないふりで足早に通り過ぎればいい。

こんな地味な生徒が通り過ぎても、気にも留めないだろう。

少しだけ足を速めて階段を下りていく。下のフロアに学生が何人かいるのが見えた。

「ジルベスタ様、わたくしは何度も申し上げました。どうしてその男爵令嬢をジルベスタ様のそばに置いていますの？」

「お前には関係ないだろう」

「わたくしはジルベスタ様の婚約者ですよ。そしてここにいる令嬢は皆、ジルベスタ様の側近の婚約者たちです。わたくしたちとは一緒にいてくだらないのに、どうしてその者はずっとそばに置くのです」

「友人だからだと言っているだろう。俺だけじゃない。皆で一緒にいるだけだ」

「友人だからだなんて、しらじらしいですわ」

問題は音だけじゃなかった。それ以上に厄介な場に近づいてしまった。

話を聞いている限り、男性側の浮気による痴話喧嘩だ。

婚約者がいるのに他の女性をそばに置いていたら、それは間違いなく問題になる。それを責めるのはわかるけれど、他人が通る場所ではやめてほしい。

これは授業に遅れてでも、違う階段を使うべきだったかもしれない。

「わたしい女性のお友達がなくて。皆さん、それを心配して一緒にいてくれるんです。ジルベスタ様も一緒にいてくれるお友達ですよ？　だから、そんなに怒らなくても……」

「ミーシャ、君が悪いわけじゃないよ。気にしないで」

「そうだよ、ミーシャは悪くないよ」

「こんなにアンジェラが口うるさいとは思わなかったな。いくらジルベスタの婚約者でも俺たちの行動に口を出しすぎじゃないのか？」

「レオンハルト、あなたまでこの男爵令嬢を庇うの!?」

「すまないな、レオンハルト。俺のことでお前たちまで巻き込んでしまつて。いつからアンジェラはこんなに口うるさくなったのだ」

「ジルベスタ様！　……そこまでおっしゃるのなら、こちら婚約を考え直しますわ。皆様、いいですわよね？」

あ……ついに婚約解消の話に発展している。

まさかこんなところでそんな話が出るなんて。こんな話を聞いていたとなれば家同士の争いに巻き込まれかねない。どうしよう。

早く通り過ぎないと……静かに、見つからないように……

「あっ！」

階段の最後の一段で滑って、転びそうになった。慌てて手すりにつかまり転ばずには済んだけれど、声を出してしまった。

しまった！　と思つて、そちらを見たら……注目されていた。

何人かの令嬢を後ろに引き連れている令嬢は泣きそうな顔をしている。

その反対側では小柄な黒髪令嬢を、令息たちが守るように囲んでいる。

令息たちを見て視線が止まる。全員が赤い呪術の糸で全身をぐるぐる巻きにされていた。

一人は顔まで執拗に巻かれていて、誰なのか全くわからなかった。

そんなおかしい状況なのに、誰もそのことには気づいていない。私だけに見える糸……どう考えてもこれはまともな状況ではない。

それ以上に、私に視線が集まっていることに耐えられなかった。

「し、失礼いたしましたっ！」

一言だけ謝って、慌てて小走りて去る。

すぐさま国史の授業教室に入り、後ろの席に座った。

授業が始まる直前だったからか、慌てて教室に入ってきた私を誰も不思議には思わな

かったようで少しだけほっとする。

ゆっくりと息を整え落ち着こうとするが、心臓がどきどきして、すぐには落ち着けうになかった。

あれはなんだったのだろうか。今まで見たものとは全く違っていた。

初めて見た呪術だった……もしかして、魅了たぐいの類なのだろうか。

もしそうなら大変なことになるけれど。

そこまで考えた時、この学園の結界を思い出した。

この学園には魔術が使える令息令嬢がたくさん通っている。間違っても魔術が暴発しないようにと、演習室以外の区域は魔術が使えないように結界が張られている。そのために学園長は結界魔術が使える数少ない魔術師である王弟殿下が務めていた。

だから魅了なんて強力な呪術が学園内で使えるはずがなかった。

だけど、それならあれはなんだったのだろう。

リーン、という音も今まで聞いたことがない音だった。

害がない魔術ならば私に音が聞えることも、見えることもない。あれは呪術だ。だけど、あの呪術にどんな害があるのかまではわからなかった。

わからない以上、気にしても仕方がない。もう関わらなければ問題ないはずだ。

私は何も聞いていない。何も見ていない。

こんなところで目立つわけにはいかないのだから。

レオンハルト、ジルベスタ、この名前を聞いて気がつかないほど、私は社交界に疎うとかった。

もし気づいていたなら対処は違っていたかもしれない。

どうしてもっと注意を払わなかったのかと、この後で何度か悔やむことになる。



前を向くのが怖い。

うっかり変な動きをしたら、私が呪術の糸を見えていることに気がつかれてしまうかもしれない。

目の前にいる、赤い糸でぐるぐる巻きの令息から目をそらしたい。

この人は、間違いなくあの時の令息だ。

中でも一番ぐるぐる巻きにされていた令息。あれ以来ずっと会わなかったから、すっかり忘れていたのに。

この学園は十五歳で入学し、基本的なことを学ぶ三年間の基礎科と自分で授業を選択する本科の二年間の計五年間を過ごす。本科一年目は皆が十八歳になることから、社交界に出る準備をする授業も含まれていた。

今日はその一環として本番のようにダンスを練習しましょうと、ホールに学年全員が集められ入り口でくじを引かされた。

パートナーを各自で決めると、あぶれてしまう者が出るからだろう。

そう、私のような者が。

「まあ、レオンハルト様のお相手、あの方なの？」

「いやだわ。私が代わって差し上げたいわ」

こそこそと話しているようで、実は私に聞こえるように話しているのはわかっている。わかつていなければならない、ここで辞退したら、それはそれで問題になる。

誰にこのくじを譲るかで揉めたら、大騒ぎになって先生に気がつかれてしまう。

本当は代わってほしいし、誰でもいいからこのくじを押し付けてしまいたいくらいだけど。

言えるわけがない……公爵家次男のレオンハルト様と踊るのは嫌だなんて。

でも、目の前にいるぐるぐる巻きの令息と踊るのは怖い。

頭から足まで赤い毛糸のようなものにぐるぐる巻きにされていて、特に目の周りは何重にも巻かれているから、どんな人なのか全くわからない。

そんな方と踊る？ 手を取るのも怖いけど……逃げたら失礼になるし、目立つことになる。

公爵家相手に伯爵家の私がそんな失礼なことをできるわけがないし、レオンハルト様の相手役として目立ってしまっている今、これ以上おかしいことはできない。

覚悟を決めてレオンハルト様に向かい合った。

そして形ばかりの挨拶^{あいさつ}を交わし、位置に着く。

ゆっくりと静かな音楽が始まると、周りも一斉に動き出した。

どこを見ていいかわからず、相手の胸のあたりに視線を落とし、リードされるままになる。

手を取られ、背中に手を回されても、ときめきよりも未知のものへの怖さが勝つてしまふ。

絶対にぎこちない動作になっているけど、それは緊張しているせいと周りは見えてくれるだろう。

恐怖でぞわぞわするけれど、一曲だけ我慢して踊ってしまえばいい。
あとは……後ろで待ち構えている他の令嬢に代わればいい。

ふと何かが動いたような気がして見ると、レオンハルト様の胸のあたりの赤い糸が動いていた。

え？ と見上げると、少しずつ顔のぐるぐる巻きもほどこけてきている。

ゆっくりだけど、確実に一本ずつほどこけて、ふつと細かくなって消えていく。
これは、なに？ どうなっているの？

あまりの驚きに目を離せずにいると……顔が見えてくる。

銀色の髪が見え、眉が見え、少し細めだが綺麗な紫の目が……目が合った！
しまった。糸に気を取られて、顔を見つめ続けるなんて失礼なことを！

レオンハルト様は、はっとした顔になり、口を開いた。

「……君は」

何か話しかけられたと思ったらレオンハルト様の足が止まる。

ダンスの途中なのに動きが止まってしまって、仕方なく私も足を止める。

男性側にリードされなかったら動けない。いったいどうしたの？

止まってしまった私たちに、見学していた人たちがざわつき始める。

「君の名前は？」

「……レイフィア・ルガード。ルガード伯爵家の長女です」

最初に挨拶したのに、全く覚えてもらっていないかったらしい。

それにしても途中で止まってまで名前を聞く必要があったのだろうか。

疑問に思ったとしても問うことはできず、黙ってレオンハルト様の次の動作を待つ。

「ルガード家か……」

話しているうちに曲が終わってほっとする。

このまま近くに待機している令嬢に交代できれば……そう思って礼をして離れようとしたら、手をつかまれてもう一度ホールドされる。

「先ほどは途中で止まってしまった。これでは練習にならないだろう？ お詫^わびにもう

一度踊って、指導してあげるよ」

にっこりと笑って言うレオンハルト様にうなづくことしかできなかった。

後ろで交代しようと待ち構えていた令嬢たちが文句を言っているのが聞こえる。

「まず、背筋を伸ばして。そう。顔を上げて、俺の目を見て。足は踏んでもいいから、下を見ないで動いて」

先ほどまで黙々と踊っていた人とは別人のようだ。

目が合った彼に微笑みかけられ、反射的に顔が赤くなってしまう。
こんなに近くで令息と目を合わせることになるなんて初めてで、どうしていいかわからない。

私は誰が見ても地味な令嬢だ。

黒髪はぼさぼさ、緑の瞳は長い前髪に隠され、いつもうつむいて歩き人と目を合わせない。誰かと話しても必要最低限で、常に一人で行動しているような子だった。

ダンスの授業とはいえ、こんなに近くにいると恥ずかしくなってしまう。
さつきまではレオンハルト様の顔を知らなかったが、あらためて見ると令嬢たちが騒ぐのも無理はないと思うほど整った顔立ちだった。

ただでさえ令息に慣れていないのに、これほど素敵な令息と踊るなんて耐えられなかった。思わず身体を離そうとしたら、背中に回された手で押さえられる。

「身体を離さないで。一定の間を置いて、ちゃんと動きについてきて。逃げないでこちらにもう少し踏み込むように、そう、上手」

指導してあげるといった言葉どおり、レオンハルト様は悪い点をしっかりと伝えてきた。

こんなに真剣に指導してもらっていると、真面目にやらなければという気持ちになる。



まだ恥ずかしさはあるが、授業だと自分に言い聞かせて落ち着かせる。

言われたとおりに動くようにすると、動きが滑らかに^ななってきた。

「動きがよくなってきた。呑み込みが早いな。できるって信じて、自分に自信を持つといいよ。綺麗に踊れている」

意外な褒め言葉に驚いたが、素直にお礼を言う。

話す機会すらめったにない公爵家の令息に、こんなに丁寧に指導してもらえた。しかも誰もが目を奪われるような素敵な令息と二曲も踊ることができた。一生の思い出にしてもいいかもしれない。

「ありがとうございます。ダンスは苦手でしたが、こんなに楽しく踊れたのは初めてです。ご指導ありがとうございました」

もう一度しっかりお礼を伝えて、すぐに後ろへ下がる。いいかげん他の令嬢に代わらないと後が怖い。レオンハルト様は何かを思い出したようで、先生のところへ向かっていた。

令嬢たちからため息が聞こえ、からまれる前にホールを出る。

レオンハルト様の赤い糸は途中で消えてしまったけれど、結局なんだったのかわからないままだった。

次の週になり、いつものように大教室の後方の隅に座る。

この授業は人気がない分、人が少なくて落ち着いていられる。

教師を待つ間、先週の授業内容を確認しようとノートを見てみると、隣に人が座った。

「そのノートを見せてくれないか？」

「えっ」

そこには先週、間近で見ても見慣れなかった、レオンハルト様がいた。

そのレオンハルト様が満面の笑みで私のノートを指さしている。

「どうして……レオンハルト様が？」

本科になって半年、今までレオンハルト様と授業で会ったことはない。

私は少しぼんやりしているかもしれないが、さすがにあんな糸でぐるぐる巻きの人に会えば覚えている。会うことがなかったというのは、選択授業がすべて違うことを意味していた。

「ちょっと事情があつて選択授業を全部変更することになった。おかげで今までの授業の内容がわからなくて。教師からも誰かからノートを借りて見るようにと言われていて。君はきちんとノートを取っているみたいだから、見せてくれないか？」

そうお願いされてしまうと断る理由がなかった。

授業は休んでいないし、黒板に書かれたことはすべてノートに書き写している。
誇れるほど綺麗な字ではないけれど、丁寧に書いている。人に見せるくらいはかまわなかった。

レオンハルト様にノートを差し出すと、ありがとうと言ってそのまま隣の席で確認し始めた。

もしかして隣の席ですつと授業を受けるつもりなのだろうか。

この教室は広い上に生徒が少ないため、友人同士でもない限り隣合っては座らない。周りからの視線が痛気がする。いや、怖くて周りを見ていないけれど。

私がこんなに焦っているのにレオンハルト様は動じず、そのまま隣で最後まで授業を受けた。

授業が終わったらすぐにノートを返してもらって、次の授業に向かおうと思っていたのに、ノートを返してくれたレオンハルト様はまた違うお願いをしてきた。

「君はきちんとノートを取っているね。板書だけじゃなくて、先生の発言まで書いてある。すごいな。字も綺麗で、とてもわかりやすかった。ついでにお願いしたいのだけど、君の選択授業の時間割を見せてくれないか？」

どうしてとは思ったが、これ以上騒がれると周りが怖い。

早くレオンハルト様に離れてほしくておとなしく時間割を見せる。

「ああ、君の選択授業、俺と全部一緒だ」

「え？」

「授業ごとにノートを見せてくれる人を探すのは大変だね。この後も一緒に授業を受けて見せてくれないか？ 君のノートは完璧だった。こんな完璧なものを見たら、他の人のノートでは物足りない」

レオンハルト様の声は少し大きく、周りにも聞こえたようだ。ノートを差し出そうとしていた令嬢たちが一斉に自分のノートを確認し、あきらめた様子で離れていった。

たしかにこれほど真面目に授業を受け、ノートを書いている令嬢はいないと思う。

学園の成績は公開されていないし、王宮に勤めるつもりでもなければ成績は関係ない。そうなれば嫁ぐだけの令嬢が真剣に授業を受ける必要もないわけで、私がこれほど真面目に授業を受けているのは他にやることがないからという理由だった。

レオンハルト様が言う、ノートを借りる人を探すのが大変という事情はよく理解できてしまった以上、強く断ることもできなくなってしまふ。

結局そのままレオンハルト様に連れていかれ、すべての授業を隣で受けることに

なった。

完璧なノートの話が伝わっていたのか、他の令嬢から直接責められることはなかったけれど、遠巻きにしている令嬢たちの目が怖い。

昼も、お礼だからとレオンハルト様の専用個室に連れていかれ、一緒に食事をするはめになった。せっかくいただいた食事だが、何を食べたのか記憶にない。

目の前で微笑んでいる貴公子に、精神力が削られていくばかりだった。

何がどうなって、こんなことになっているの？

帰りの馬車の中、一人うなだれていた……明日からの学園生活が怖い。

今日一日で令嬢たちにどれだけ注目されたか。

せっかく目立たないように三年半過ごしてきたのに、その努力が無駄になりかけている。

せめてこの話が下の学年に在籍している義妹^{いもぎみ}には伝わらないでほしいと願う。もし知られてしまったら、どんなひどい仕打ちをされるかわからなかった。

早く平穏な生活に戻ってほしい。

だけど、私の波乱の生活はまだ始まったばかりだった。

レオンハルト様と一緒に授業を受けるようになってから二週間たっても、私はまだ解放されていなかった。

「わからないところがあつたら、すぐ確認したいから。ノートだけだとわからないこともあるだろう？」

そうレオンハルト様に言われてしまい、また断れなかった。

最初の数日間^{すうにちかん}はノートのことがあるために断る理由もなかったが、一週間も過ぎればノートもすべて書き写せているはずだし、もう私は必要ないだろうと思っていたのに。

半年間も遅れて授業を取るのだから知らないことが多いのはそうだろうし、授業でわからない時にすぐに聞きたいと言われてしまえば断りにくい。気がついたら全授業を隣で受け、昼は個室と一緒に食事をし、そのまま馬車に乗るのを見送られるまで拒否する間を与えられずにいた。

私、レオンハルト様に何かしてしまったのだろうか……

ここまでくると怖いというよりも、とにかく疑問だった。

私なんかと一緒にいて、いいことがあるのだろうか。

ほじめていった赤い糸。ぐるぐる巻きだったレオンハルト様。同じようにぐるぐる巻

きだった周りの令息たち。

あれと何か関係するのだろうか。

私と踊った時に赤い糸がほどけたことも関わっている？

でも、それをこちらから聞くわけにはいかなかった。

私の固有スキルは、誰にも言っていないのだから。

しかし、その疑問は日に日に強くなっていった。

周りの令嬢の視線が怖い上に、今はレオンハルト様が何か知っているのではないか、そんな不安で少しも落ち着かなかった。

レオンハルト様に微笑まれるたびに、どうしていいのかわからなくなっていく。

「これ、受け取ってくれないか？」

授業が終わって人がほとんどいなくなった教室で、レオンハルト様から何かを手渡された。

「これはなんですか？」

手渡されたものは、長細い小さな軽い包みだった。綺麗に包装されて可愛らしいリボンで結ばれている。

「開けてみて？」

その場で開けてみると、木でできた小さな櫛^{くし}だった。

「櫛？」

「そう。それを使うと艶^{つや}が出て、まとまりやすくなるらしい。……この櫛^{くし}をレイフィアの髪で試してみたいだろうか？」

「えっ。試すって」

「ちよっと知り合いから頼まれて。俺に姉妹はいないし、他に頼めるような女性の知り合いもないから。実験に付き合うと思って、髪を貸してくれないか？」

驚いているうちに、私の手から櫛^{くし}を取って後ろに回る。素早い動きに抵抗することも忘れ、気がついたらレオンハルト様に髪を梳^とかされていた。

……令嬢の髪って、簡単にふれさせていいものだっただろうか。

「ああ、やつぱり。レイフィアは綺麗な髪なのに、わざとぼさぼさにしていたのか。見られたくないのかと思って人がいない時間にしてよかった」

「……」

「ちよっと独り言だと思って聞いてくれる？ 俺はつい最近までおかしなことに巻き込まれていたようなんだ。知らない間に視野が狭くなったというか、ちゃんと考えら

れなくなっていた。使用人からも体調でも悪いのかと心配されるほどだったが、自分でも全くわからなかった。昔からの友人が離れて、周りで婚約解消が立て続けに起きて、それでも何も感じなかった。問題だと気がつくこともなく過ごしていた。身体と頭と目を、何かで拘束されていた感じだった。それも拘束がなくなっただけで、自分がおかしかったことを知った」

あのぐるぐる巻きのせいで、そんなことになっていたのか。レオンハルト様だけ異様に顔や頭に集中して糸が巻かれていたのは、そういうことだったのかもしれない。

でも、どうしてその話を私に。

「レイフィアと踊った時に、すべての拘束がなくなった。少しずつ全身が軽くなっていて、目が見えるようになったと感じたら、目の前にレイフィアがいた」

まずい……気がつかれている？ どうしよう。どう誤魔化したら。

「俺はレイフィアがきっかけだと思っている。でも、それを誰かに言うつもりはない」
「えっ」

「何か隠さなきゃいけない理由があるんだろう？ ああ、返事はしなくていいから。これは独り言だ。そのまま聞くだけでいい。それで、拘束がなくなった後、王宮に行って魔術の跡を調べてもらったら、精神干渉系の魔術がかけられていたことがわかった。し

かも未知のものだそう。学園の結界を調べたところ、こちらでも魔術が使えるように結界を変えられていた。おかげで王宮魔術師たちは大混乱だ。精神干渉はおそらく俺だけじゃなくて、ジルベスタたちにもかかっているはずだ。しかも、なぜか解術できた俺と違って、ジルベスタたちは解術できないらしい。原因をさぐる間はまた影響が出たりしないようにと、俺はジルベスタたちから離れることになった。それが選択授業を全部変更した理由」

レオンハルト様はため息交じりに話し、ずっと私の髪を梳いている。

丁寧に丁寧にゆつくりと梳いてもらったおかげで、さらさらと流れた髪が肩にかかる。人に髪を梳いてもらうのなんて、何年ぶりだろう。

話の内容に危機感を持たなければいけないのに、なぜか心が落ち着いていく感じがする。

「レイフィアの存在を知られたくない。俺は君のことを恩人だと思っている。おそらく、このことが他に知られたら大騒ぎになるだろう。俺はレイフィアがいいように利用されるのは見たくない」

私をいいように利用？ 何に!?

髪を梳いていたレオンハルト様の手が止まり、頭を撫でられる。

「大丈夫、落ち着いて。顔色が悪くなっている。そんなことがないように、レイフィアを守りたい。俺と一緒にいれば他の人は手を出せなくなる。公爵家の力も使えるから」一緒にいればって。今の生活がしばらく続くということだろうか。

「でも、私と二人で行動するなんて」

「それがね、ジルベスタたちと離れる理由にもちようどいい。解術できていないジルベスタたちに本当のことを話すわけにもいかない。俺に好きな人ができて、その人と一緒にいたいからってことにしている。自由に動く理由にもなるし、一緒にいて守る理由にもなる。レイフィアも解術のことは知られたくないだろう？」

私がレオンハルト様の好きな人っていうことにする……そんなことが知られたら、何ができるか。

でも、私の力が気がつかることになったら、そのほうが怖い。

あんなに目立ってはいけないってお兄様から注意されていたのに。

どうしよう。どうしたらいいの。

「ねえ、何を悩んでいる？ これから一緒にいることで何か困るなら、聞いておきたい」

「レオンハルト様は人気があるので、他の令嬢から何か言われそうで怖いです。それに、婚約者や恋人はいらっしゃらないのですか？」

「それについては、どちらもいないから問題ない。他の令嬢たちについてもそうならないうように対処しよう」

婚約者も恋人もないと聞いて、少しだけほっとする。前に会った時に集団で揉めていたこともあり、もしそんな人がいたら私が一緒にいるのはまずいのではないかと思っていた。

レオンハルト様側に問題がないとすれば、残るのは私の問題だけ……

「私がレオンハルト様に好かれたなんて聞いたら、義妹が怒ると思います。詳しくはお話できませんが、義妹の機嫌を損ねると大変なのです」

「義妹か……わかった。すぐには無理だが、それも対処する。他には？」

「……ありません」

本当は目立ちたくないって言いたかったけれど、それはもう無理な気がしていた。

ここ二週間レオンハルト様と一緒にいたせいで、同じ学年のほとんどの令嬢に存在を知られてしまっただろう。それにこれからも一緒にいるというのなら、目立たないわけがない。

「じゃあ、明日からもよろしく。それと、今日の帰りから送り迎えもするから」

「えっ」

「他の令嬢たちが怖いと言っていたよな？俺と一緒にいる時は大丈夫だとは思わけれど、一人になったら襲われるかもしれない」

「……よろしく願います」

負けた。完全にレオンハルト様に負けた気がする。

それ以上抵抗する気力をなくし、言われるがままエスコートされ、家まで馬車で送っていただいた。

次の日の朝、レオンハルト様が迎えに来る時間の前から伯爵家の玄関で待っていた。

レオンハルト様から贈られた櫛くしを使わないのは申し訳なくて、ぼさぼさの髪だけはきちんと梳とかした。それでも顔の半分以上が前髪で隠れているけれど、顔を出して歩くようなことは許されない。

昨日の帰りに伯爵家の馬車で送ってもらったことは隠せず、お父様たちから質問攻めにされたが、どうしてこうなっているのか私もわかっていないために、ほとんど答えられなかった。

今日からは朝も迎えに来ることは伝えたが、その際に義妹いもうとのフルーラが喜んでいたのが気にかかる。

だからこそ、フルーラに見つかる前に出発したくて早くからレオンハルト様を待っていた。

やがて、遠くからでもすぐにわかるほど美しい馬車が近づいてくる。

伯爵家のどこにでもあるような馬車とは違い、公爵家の馬車は特別に作らせた一点物のようだ。通常の馬車よりもひと回り以上大きく、走行中の揺れも少ない。見た目以上に性能の差がよくわかる代物しろものだった。

その馬車が伯爵家の玄関前に止まり、中からレオンハルト様が降りてくる。

私が待っているのを見ると驚いた顔になった後、晴れやかな笑顔に変わった。

「おはよう、レイフィア。待っていてくれたのか？」

「おはようございます、レオンハルト様……」

大声を出す中に聞こえそうで、挨拶あいさつが小声になってしまふ。

こそこそとしている雰囲気を感じとったのか、レオンハルト様も周りを窺うかがった。

「もしかして、家の者に何も言わないで出てきた？」

「いや、そういうわけではないのですが……早く行きたいです」

何かを隠しているのはわかっただろうけど、レオンハルト様は何も聞かずにうなずいた。

公爵家の馬車に私を乗せるためにレオンハルト様が手を差し出してくれる。その手を借りようとした時に伯爵家の玄關が大きな音を立てて開いた。

「お義姉様！ 置いていくなんてひどいです！」

中から勢いよくフルーラが飛び出してくる。

赤い髪だけでも目立つのに、その髪には華美な飾りをつけている。紺色の制服には縁取りに赤いレースが縫い込んであり、似合っているがどう考えても学生としては派手だ。

本来ならお義母様が注意すべきことなのだが、彼女が今までフルーラに何か注意しているところは見たことがない。

できればフルーラに見つからないうちに出発したかったけれど、見つかってしまった。どうやっておとなしくさせようかと考える間もなく、フルーラはレオンハルト様を見つめ笑顔で駆け寄ってくる。

「あ。レオンハルト様、おはようございます！ 今日から送り迎えしてくださると聞いて、うれしいです。それなのに一人で行ってしまうなんて、お義姉様ってば本当に意地悪なんだから！」

満面の笑みでレオンハルト様に挨拶した後、私へは拗ねたような顔をしてみせる。

いつもなら私に怒鳴っていてもおかしくないが、さすがにレオンハルト様の前だから抑えているらしい。

せめてレオンハルト様に会わせる前に説明しておくべきだった。

こんな風に可愛らしく挨拶されたら、レオンハルト様だってフルーラのことを気に入るだろう……

三人で馬車に乗るのかな……そう思ったら、胸がきしんだような気がした。

「どこの令嬢かは知らないが、俺は君を送り迎えしないよ。俺はレイフィアを迎えに来た。邪魔しないでくれ」

一瞬誰が話しているのかと思ったくらい、レオンハルト様の声は冷たかった。いつもの柔らかさはなく、硬質な隙のない話し方に驚く。

レオンハルト様は冷たい表情でフルーラを見ている。これは誰なの？

「……え？」

「聞こえなかったか？ 君に用はないって言ったのだけど」

「そんな！ ひどい！」

「知り合ってもいない男の馬車に乗り込もうとするような、恥知らずな令嬢は必要ない。失礼するよ」

レオンハルト様に冷たくされたのが予想外だったのか、フルーラの顔は怒りで真っ赤になった。それなのにレオンハルト様はフルーラを見もせずに、私の手を取って馬車へと乗せてくれる。

気がついたら馬車はもう走り出していた。

遠くから何か叫ぶ声が聞こえたが、聞こえなかったことにしたい。

今のはなんだったのかとレオンハルト様を見ると、何もなかったかのように平然としている。

あのフルーラがこんなにあっさりと袖にされるなんて。ダメ……耐えきれない。

「ん？ レイフィア？ 大丈夫？」

「……ふふっ！ ふふふふっ！ フルーラにあんな顔させるなんて！ レオンハルト様って毒舌だったのですか？」

笑いをこらえきれなくて、声を上げて笑ってしまった。

はしたないと思うけれど、耐えきれなかった。

断られるなんて少しも思っていなかったフルーラは、何を言われたのかわからなくて一瞬きよんとしていた。何年も一緒に暮らしているけれど、あんなフルーラは初めて見た。

「知らなかったか？ 俺は毒舌で冷たくて有名のようだが」

「有名なのですか？ 知らなかったです」

本気で言っているのか真面目な顔のレオンハルト様がおかしくて、笑いが止まらなくなる。

こんなに笑ったのは何年ぶりだろうか。苦しくて涙が出そうなくらいだ。

「よくわからないけれど、レイフィアが楽しそうでよかった」

「ええ」

帰ったらフルーラに何か言われるだろうけれど、それでも気持ちがつきりしていた。

その日も一日中レオンハルト様の隣で授業を受けて、あとは帰るだけとなった。

いつもならそのまま帰宅するのに、今日はレオンハルト様が廊下で誰かに呼び留められた。その方と二、三言葉を交わすと戻ってきたが、少し表情が曇っている。

「ごめん。ちょっと学生会に呼ばれてしまった。すぐ済む用事だから、ここで待っていてくれる？」

「わかりました。本を読んでいますね」

レオンハルト様は学生会役員ではなかったはずだけど、何か相談でもあるのかもしれ

ない。

この学年には王族も高位貴族も多く在籍している。学生会として行事を行う時に彼らへ不手際があれば咎められることもある。おそらくそうならないように事前に相談されているのだと思う。

教室でこのまま待つのには問題ないし、気にしなくてもよかったのに、レオンハルト様はもう一度、すぐ終わるからと言って出ていった。

それほど長い時間ではないだろうし、本を読んでいれば退屈しない。

最近レオンハルト様と一緒にいることが多いから本を読まずにいたが、読みかけの本がカバンの中に入っている。

取り出して続きを読み始めたけれど、どうにも内容が頭に入ってこない。おかしい……ついこの間まではずっと一人で過ごしていた。時間があれば本を読んでいたし、何も問題ないはずだった。

時間がたつにつれて落ち着かなくなる。

一人で過ごすことに慣れていたはずなのに、今はレオンハルト様の不在が気になってしまう。

お手洗いででも行けば落ち着くかもしれないと思って、教室の外に出る。

もうあたりは人が少なくなっていた。

お手洗いを済ませたところで、そういえばレオンハルト様はすぐ終わると言っていたことを思い出し、急ぎ足で教室へと戻ろうとした。

廊下を曲がったところで思わぬ人に呼び止められ、その声の主がわかった瞬間に身構えた。

栗色の髪と薄茶色の意地悪そうなフリ目で、ずんぐりとした身体に大きな声。

「よう、レイフィア。久しぶり。あまり学園内で会わなかったな」

隣りの領地のベトロフ伯爵家の次男ジャンだった。話すのは数年ぶりだけど、あいかわらず嫌な笑い方をしている。昔からからまれることが多く、苦手な幼馴染だ。

いるのはわかっていたから、学園の中で会わないようにと気をつけて行動していたのに。

「ちようどいいや。お前に話があったんだよ。ちよつと来いよ」

私の返事も聞かないジャンに腕をつかまれて、ぐいぐいと引つ張られる。

「ちよつと、やめて。さわらないで」

やめるように言っても離してもらえず、なぜかにやつと笑われる。

「何言ってるんだよ、将来の旦那様に。恥ずかしがるなよ」

何を考えているのか、やっぱり人の話を聞いてくれない。本気で嫌がっているのに、力では敵わず振りほどけなかった。

「やめて。あなたとなんて結婚しないわよ。離して！」

「はああ？ 何言ってるの？ お前をもらってやる奴なんて、他にいるわけないだろ。いいから、おとなしくしていろよ」

ジャンが私を空き教室に連れ込もうとしているのがわかって血の気が引く。こんな人氣のない時間にそんなところに二人でいるのが見つかったら、既成事実になれかねない。どうしよう。抵抗しているのに力が強くて引きずられる。怖い。

どうすることもできず、空き教室のドアの前まで来た瞬間。ダン、と大きな音が響いて、手を離された。

音のしたほうを見ると、ドアをレオンハルト様が蹴っていた。ジャンは見るからに真っ青な顔になっている。

「お前、何をしている？」

いつも低いレオンハルト様の声が、もっと低い。もしかして怒っている？

「いえ！ 何もしていません！ この女は婚約者です。話をしようと思っただけです」

婚約なんてしたこともないのに嘘を言い出したジャンに反論しようと思ったけれど、それよりも早くレオンハルト様が口を開いた。

「レイフィアは俺が婚約しようとして申し込んでいるのだが。それに伯爵からはレイフィアに婚約者がいるとは聞いていない」

「えっ」

「なあ、俺はそんな話は聞いていないのだけど、婚約者だって？」

「いえ、すみません。僕の勘違いです……」

「そうだよな。まさか公爵家の婚約者となる令嬢に何かするつもりか？」

「い、いいえ！ しません、しません！ すみませんでしたあああ」

あっけなく走り去ったジャンを見て、ほっとする。

その瞬間、かくつと膝の力が抜けて座り込みそうになった。もう少しで床につくところで、レオンハルト様に抱きしめられる。

「大丈夫か？ 一人にして悪かった。腕を見せてくれ」

支えるように抱き寄せられたまま、ジャンに握られていた腕を確認される。力いっぱい握られていたのか、赤く手の痕がついていた。

「ドアじゃなく、あいつを蹴ればよかった」

レオンハルト様はそれを見ると顔をしかめて、怒り足りないように低い声でつぶやき、さっと私を抱き上げた。

「えっ。レオンハルト様、下ろしてください！ 少し落ち着けば歩けます」

「このまま医務室に行くよ。早く冷やさないと。落とすのは嫌だから暴れないで。この時間なら他の学生もいないし、大丈夫だ」

足に力が入らないのも、腕を痛めているのも事実で、反論できない。

それに、今思い出しても怖くて、落ち着くまで時間がかかるのはわかっていた。

だからと言って、抱き上げられて運ばれるなんて……誰かに見られたらどうしよう。背中に戻されている腕はともかく、どうしてもう片方の腕が外側から回されているのだろう。

いわゆるお姫様抱きではなく、子どもを抱きかかえるみたい……いいえ、これは抱きしめられていると言っていると思うのだけど。

レオンハルト様の胸に密着させられて、制服につけられているほのかな香水の匂いに気がつく。これほど近くに寄らなければ気がつかないほどのささやかな香り。私以外にも知っている人はいるのかなんて思ってしまった、変な考えを打ち消した。

抱き上げられたまま医務室に入ると、先生に驚かれた。

先生が治療するのかと思ったら、レオンハルト様が先生から湿布しふを受け取っている。

腕といっても手首に近いところだし、ちよつと制服をめくれば見えるのだけど、令嬢を治療するためにある専用の休憩室へと連れていかれた。

「そこまでしなくても、これくらい平気ですよ？」

見た目は痛々しく見えるかもしれないけれど、数日もすれば痛みはなくなるだろう。このくらいのあざなら、お父様やお義母様かあに叩かれた時のほうが痛い。腕なら制服で隠せるし問題はなかった。

それなのに、なぜかレオンハルト様のほうが痛みをこらえているような顔をしている。

「だめだよ。ちゃんと治療させて。ちよつとでもあざが残ったら俺は自分を許せなくなる」

「そんな。これはレオンハルト様のせいじゃないのに」

「俺がレイフィアを守るって言っただろう。困ったことがないように、きちんと守るって言ったのに。それなのに、隙すきを作ってしまうなんて……すまない」

「謝らないでください。私も油断していました。教室から出なかったら、あんなのに会わないで済んだのに」

ずっと避けていたのに、それを忘れていたなんて。

レオンハルト様のことで頭がいっぱいで、警戒していなかった私が悪い。なのに、何を言ってもレオンハルト様はうなずかなかった。

「あれは、誰だ？ 婚約者と言っていたが、そんな話が出てくるのか？」

「まさか！」

「じゃあ、どうして。あいつは何をしようとしていた？」

「彼は、うちの隣の領地のペトロフ伯爵家の次男でジャンといいます。小さい頃から顔を合わせる機会が多かったのですが、付きまとわれていたため昔から苦手。大きくなったら結婚してやるなんて、いつも上から目線で……ジャンは伯爵家を継げないので、うちが持っている子爵位がほしいのだと思います」

「ああ、ルガード伯爵家は子爵位も持っていたな。お兄さんが伯爵位を、レイフィアが子爵位を継ぐ予定だったのか？」

「いいえ。……おそらく、お父様はどちらもフルーラに継がせるつもりでしょう。お父様が再婚してフルーラがうちに来たのは私が十一歳の時なのですが、お母様が亡くなった後はあまり交流がなかったので、ジャンはフルーラのことをよく知らないのです」

「そういうことか……」

「それにしても……レオンハルト様が私に婚約を申し込もうとしているなんて。そんなことを言ってしまったてよかったのですか？」

「ああ、それは大丈夫だ。詳しい話はまだ言えないけれど、ちょっと事情があつて。でも、婚約するって言ったことは問題ないから心配しないでもいい」

「そんな……」

公爵家のレオンハルト様が婚約を考えているなんて、軽々しく口にしていいはずはないのに。もしこれでレオンハルト様が家の方に何か言われたりしたらと思うと不安になる。

レオンハルト様はもうこの話を続ける気はないのか、無言で私の腕に湿布しふを貼ぶってめくっていた袖を直してくれる。それが終わったら、休憩室の外へと声をかけた。

「ジョセフ」

「呼びました？」

返事があったと思ったら、ドアが開いて男性が一人中へと入ってくる。

こげ茶色の髪に同じ色の瞳。すらっとした長身の男性は執事服を着ている。見た目からして二十代後半くらいだろうか。

学園内に使用人を連れてきてはいけなはずだけど、公爵家の方だから特別なのかも

しれない。

「レイフィア、これはジョセフ。うちの執事見習いをしている」

「レイフィア様、ジョセフと申します。執事見習いと言いつつ、ほとんど若様専用の隠密です。なんでも申し付けてくださいね」

「は、はい。よろしく願います」

隠密って普通は隠すものだし、冗談なのかと思ったけど、二人とも笑っていなかった。もしかして本当に隠密なのかしら。じっと見ていたら、レオンハルト様が軽いため息をついた。

「余計なことは言わなくていい。ジョセフ、ジャンとその周辺、調べておいてくれ」
「かしこまりました」

ジョセフはうなずいて、すぐ休憩室から出ていく。

聞きたいことが多すぎて混乱していると、レオンハルト様に手を差し出される。

「さあ、レイフィア。遅くなる前に帰ろうか」

微笑んでいるレオンハルト様に聞いてはいけないような気がして、黙って手を乗せた。

カタコトと進む馬車に揺られ、我慢していたのに、うとうとしてしまう。

伯爵家の馬車とは違い、揺れの少ない公爵家の馬車は乗り心地がよすぎた。

今日は、というよりもレオンハルト様と関わってからいろんなことがあった。思っていたよりも疲れがたまっていたのかもしれない。頑張ってはみたけれど、眠気に勝てずに意識を手放してしまった。

「ねえ。あの子はどうしましょう？ 長男はともかく、娘は二人もいらないわねえ」

「レイフィアはそのうちどこかの後妻にでも出せばいい。持参金ももったいないからな。できれば支度金を積んでくれるような家だといいたが」

「そうねえ。あの子が固有スキルを持つてたら、その分高く売れるかしら」

「あいつの娘だからな。固有スキルを持つてるかもしれない。……忌々しい」

「うふふ。自分の娘なのに、ひどいこと言うのね」

「あいつが産んだからと言って、俺の娘とは限らん。黒髪も緑目も俺とは全く違う。あいつそっくりだ。浮気相手にでも似ていれば、すぐにでも追い出せるというのに」

「ね〜お父様〜お母様〜。お義姉様はフルーラの本当のお姉様じゃないの？」

「ああ、違うよ。俺の娘はお前だけだよ、フルーラ。あんなのはそのうち消えるから、気にしなくていいんだよ」

ああ、これは何度も見た夢だ。久しぶりに見た気がする。夢だけど、本当にあったことだった。お父様とお義母様の話をこっそり聞いてしまった場面だ。

お母様が亡くなってひと月もたたずにお義母様とフルーラがやってきた。

その日、夢と同じ会話を聞き、フルーラとは血のつながりがないと思っていたのに、お父様の裏切りを知ってしまったのだ。

お父様が本当の娘だと思っているのはフルーラだけ。

私は愛されていないどころか疎まれている……

教会で鑑定してもらい、私の固有スキルがわかったのは、この一年後のことだった。

一人で行った教会からの帰り、私は固有スキルのことは誰にも話さないと決めた。お父様たちに知られたら、どこかに売られてしまうと思ったから。

忙しそうにしているお兄様にも相談できなかった。

固有スキルのことは絶対に隠し続けなければいけない。

見つかったら、私はどうなってしまうのか……お母様……私はどうしたらいいの？

第二章

母上が亡くなった。

王宮のお茶会に呼ばれて、いつものように出かけていった母上は、真つ青な顔をして帰ってきた。

そして屋敷に着いた馬車からなんとか降りると、そのまま倒れるように気を失った。

毒を盛られたのかと思つて医師を呼んだが、毒の反応は何も出なかった。

それなのに母上は日に日に衰弱すいじやくしていき、一度も起き上がることなく半年後に亡くなつてしまったのだ。

母上の葬儀の日、起きてこない兄上を最初に発見したのは侍女だった。

どう見ても母上と同じ症状だったことから俺は会わせてもらえず、兄上は侍女と離れに隔離された。

もしかしたら感染症なのかと思われたが、兄上以外に同じ症状が出た者はおらず、たまたま似た症状の病気になったと診断された。

父上は母上の葬儀には出席したものの、終わるとすぐに別邸へと帰っていった。